

2016年湘南藤沢学会 「研究助成金」 成果報告書  
『相槌のスキル』～会話に与える影響～  
慶応義塾大学 総合政策学部 4年 伊達 理英子

## 1. 活動日程、会場

2016年6月6日～7日の二日間、小倉の北九州国際会議場で行われた2016年度人工知能全国大会（第30回）に参加した。私は、5日に行われた“OS-14 身体知の表現と獲得”のセッションにて自身の研究の口答発表を行った。以下にその活動報告と今後の課題についても記していく。

## 2. 研究の目的

“相槌”と言ってもその定義は実に曖昧である。“相槌”という言葉で誰もが共通して考えるのが、頷きと間投詞と考えられる。事実、辞書には相槌とは相手の話に頷いて調子を合わせること、とある。しかし、一方で相槌の語源はというと、鍛冶で二人の職人が交互に槌を打ち合わすこと、とある。この意味で考えると、相手の視線や息づかいや手の動きなど複合的に相手の反応を捉えて、絶妙な間で槌を打ち合っていることが考えられる。そこで本研究では、単に相槌が頷きや間投詞だけで構成されているのではなく、他の要素も含むと考え、相槌をより多義的に捉える。多義的な相槌が他者や会話に対してどのような影響を与えるのかについて観察・分析・考察を行い、私たちが普段無意識的に行っている相槌スキルの解明の糸口を掴むことを本研究の目的とする。

また、研究に関係のない話に思われるかもしれないが、第一著者はよく友人から相談を受ける機会が他の人よりも頻繁ではないかと感じることもある。これには様々な要因が考えられるが、『相槌がうまいね』とひとから褒めてもらうことが多いのは、その要因の一つかもしれない。当の本人はというと、何か意図的に頷きや間投詞を多くしてみようとか、相槌に関して特別のこだわりがある訳でもない。そのため、他人から評価してもらえる『相槌がうまい』という言葉は、単に『頷きと間投詞がうまいね』と言われているだけではないように感じる。それらを超えた、私の身体の反応が醸し出す全体的な雰囲気のようなものを指しているのではないかと解釈している。“相槌”を多義的に捉えて、第一著者の“相槌のスキル”を解き明かしたいと考える本研究の動機と目的はそこにもある。

### 3. 研究成果

本研究では、相槌が単なる頷きや間投詞だけで構成されているのではなく、多様なモダリティによって構成されていることを二つの事例を用いて示した。多様なモダリティとは例えば、視線を中空で泳がせてみたり、上半身の姿勢を変えてみたり、食事動作を一時的にやめることなどを指す。これらは全て、単に自己満足的に行っている動作ではなく、相手の語りの展開やそれに伴う身体表現の流れに順応する形で、相手に示しているものである。これらのモダリティを複合的に相手から読み取り、自分も示すことで、最初に述べたような“槌を打ち合う”ことに成功しているのである。これらのモダリティは、単体で起こる場合も考えられるが、多くの場合は、同時並行的に様々なモダリティが複合して相槌として示されることが多い。

また、今回の学会を通じて、色々な研究者の方々からの研究に対するフィードバックを頂く事ができ、自身の研究に生かせる新しい観点をいくつも発見することができた。例えば、私が本研究で対象にしていた事例に関して言えば、事例1では私は食事動作について微視的に記述していたが、ある研究者の方から『Dが話のなかで、水に手をかけているところは相槌に関係ないのか』というご指摘を頂く事ができた。その指摘をもとに、再度対象とした動画の映像を見てみると、明らかにDの水を飲むという行為が、相槌として説明できると考えられた。このご指摘は、今回の研究のみならず、今後の自身の研究にも活かせると確信している。

### 4. 今後の課題

今後の課題として考えられるのは、私の相槌のスキルだけの研究に限らず、会話全体における相槌の影響がいかなるものかもさらに探求していきたいと考える。また、最終的には私の相槌の多様な事例のデータを今後より蓄積し、ある程度のパターン分けをしたいと考える。また、現時点で微視的に行為について記述しているつもりだが、まだまだ漏れがあるので、それに関してもより微視的な研究をしていけるようにしたいと考える。

### 5. 謝辞

今回、研究助成金を出して頂いた湘南藤沢学会様には心より感謝申し上げます。今回の貴重な学会での論文発表の経験を、今後の研究に必ずや生かしてくことをお約束致します。